

# 深イ～話！

No.36

——作家 三浦綾子「人間の悲しい性」より——

これは時折、講演で話すんですが、「泥棒と悪口を言うのと、どちらが悪いか」私の教会の牧師は「悪口のほうが罪が深い」と言われました。

大事にしていたものや、高価なものを取られても、生活を根底から覆くつがえされるような被害でない限り、いつかは忘れます。少しは傷つくかもしれませんが、泥棒に入られたために自殺した話はあまり聞かない。

だけど、人に悪口を言われて死んだ老人の話や少年少女の話は、時折、聞きます。

「うちのおばあさんたら、食いしんぼうで、あんな年をしてても三杯も食べるのよ」と陰ふんがで言った嫁の悪口に憤慨し、その後一切、食べ物を拒否して死んだ、という話があります。

それと、精神薄弱児の三割は、妊婦が三か月以内に強烈なショックを受けた時に生まれる確率が高いと聞いたことがあります。ある妻は小姑こじゅうとに夫の独身時代の素行を聞き、さらに現在愛人のいることを知らされた。それは幸せいっぱい兄嫁への嫉妬から、そういうことを言ったのです。

この小姑の話にちょうど妊娠したばかりの妻は大きなショックを受け、生まれたのは精神薄弱児だったそうです。恐ろしい話です。

私たちの何気なく言う悪口には人を死に追いやり、生まれてくる子を精神薄弱児にする力がある。それなのに、私たちはいとも楽しげに人の悪口を言い、また聞いてしまいます。そしてああ今日は楽しかった、と帰っていく。人の悪口が楽しい。これが人間の悲しい性(さが)です。

もし自分が悪口を言われたら夜も眠れないくらい、怒ったり、くやしがつたり、泣いたりする。自分の陰口をきいた人を憎み、顔を合わせても口をきかなくなるのではないのでしょうか。

自分がそれほど腹が立つことなら、他の人も同様に腹が立つはず。そのはずなのに、それほど人を傷つける噂話をいとも楽しげに語る。

私たちは自分を罪人だとは思っていない。罪深いなどと考えたりしない。

「私は、人さまに指一本さされることもしていません。」私たちはたいていそう思っています。

それは私たちは常に、二つの尺度を持っているからです。

「人のすることは大変悪い」「自分のことはそう悪くない」

自分の過失とがを咎める尺度と、自分以外の人とがの過失を咎める尺度とはまったく違うのです。

一つの例を言いますね、ある人の隣家の妻が生命保険のセールスマンと浮気をした。彼女は、「いやらしい。さかりのついた猫みたい」と眉をひそめ、その隣家の夫に同情した。何年か後に彼女もまた他の男と通じてしまった。だが彼女は言った。

「私、生まれて初めて、素晴らしい恋愛をしたの。恋愛って美しいものね」

私たちはこの人を笑うことはできません。

私たちは自分の罪が分からないということでは、この人とまったく同じだと思います。